經濟論叢

第107巻　第1号

経営管理におけるシステム概念の
変遷について (1) ……降　旗　武　彦　1

戦前の日本製造工業の
労働生産性の国際水準……行　沢　健　三　21

分業と直接に社会的な労働……青　木　國　彦　43

研究ノート

アダム・スミスの『修辞学および
文学論』講義……出　口　勇　蔵　63

昭和46年 1 月

京都大學經濟學會

《研究ノート》

アダム・スミスの『修辞学および文学論』講義

出　口　勇　蔵

はしがき

昭和40年12月4日に，京都大学法経第7教室で，「アダム・スミスの会」は公開講演会をもよおした。当日には，当時の東京大学教授，大河内一男氏と立教大学の小林昇教授のほかに，わたくしが演壇にあがった。わたくしの講演の題目は上にかかげた通りのものであったと思う。

この研究ノートの本文は，その時の録音盤を字になおしたものである。5年以前の言表で失礼ではあるが，アダム・スミスの思想の幅と時代とを知っていただくことは時期をえらばないと考えて，ここに発表することにした。

I

アダム・スミスの思想のうち，これまでほとんど知られていない部門のものをとり上げて，話題を提供しようと思う。

1958年の秋，スコットランドのアバーディーン Aberdeen でおこなわれた，ある蔵書の競売で，講義を筆録した古いノートが2冊あらわれ，ロージアン教授 John M. Lothian という人がそれらを購入した。教授があとで調べた結果わかったことは，それらがいずれも，アダム・スミスのおこなった講義を書きとどめたものであるということであった。そのひとつは「法律学」の講義のノートであり，5冊の分冊のうち，第1冊が欠けているものであった。さらに刻明に調査すると，このノートは，以前にキャナン Edwin Cannan が公刊して，スミスの若いころの思想の内容を知るために大きく貢献したところの，いわゆるスミスの『講義案』(*Lectures on justice, police, revenue and armes etc.* 邦訳『グラスゴウ大学講義』昭和22年）と同じ年の講義の，他の学生の手になるノートであることがわかった。そしてあたらしいこのノートの方が，『講義案』よりも内容がずっとゆたかであるというから，この文献の公刊は，われわれの大きな期待をよびおこす。ところで，いまひとつのノートは2分冊に製本されていて，その背に『スミス博士の修辞学講義ノート』*Notes of Dr. Smith's Rhetorick Lectures* と表記

されているという。

この『修辞学ノート』は，スミスがグラスゴウ大学で教授をしていた最後の学年，つまり1762年から63年にかけての学年の，講義をしるしたものである。

いま，スミスの経歴を少しかえりみると，つぎのことがわかる。かれがオックスフォード大学での6年間の留学から故郷にかえった（1746年，そのときスミスは23歳）あとで，かれはエディンバラで公開講義 public lectures をおこなった。それは1748年から1751年にかけてであった。その時のくわしい事情はまだよくわかっていないといわれるが，ともかく，聖職につく気のなかったスミスは，ケイムズ卿 Lord Kames のような友人たちのすすめで，「当時エディンバラで聴けるのとはちがった一連の公開講義」をおこなうことになった。これが「修辞学と文学との講義」Lectures on Rhetoric and Belles Lettres であった。この講義をきいたのは，主に法律学と神学の学生たちであったといわれるが，かれらはスミスの講義を「賞讃すべき講義」admirable lectures と評判したということであり，スミスには収入のみちが開けたことにもなったのである。

1751年に，スミスがグラスゴウ大学の論理学の教授に就任することになったのは，公開講義にたいするこの好評判のせいでもあった。そしてその明くる年には，道徳哲学講座の担当者，クレイギー Thomas Craigie のあとをおそって，その講座の担任者となるのであった。

スミスは，グラスゴウ大学の教壇に立ったときにも，公開講義と同じテーマの講義をつづいておこなったようである。つまり，上にのべたように，ここにとり上げるのは，1762年から63年にかけての，道徳哲学講座の担当者としてのスミスの講義の内容であるのである。

このノートは，発見者で現在の所蔵者である，アバーディーン大学のキングス・カレッジのロージアン氏が編集し，解説をつけて，公刊された。『修辞学および文学論講義』*Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, Reported by a Student in 1762–63, Edited with an Introduction and Notes by John M. Lothian, Thomas Nelson and Sons, 1963, XI, pp. 205がこれである。

『修辞学』といえば，ひどく現代ばなれをした学問で，近代とは無縁なもののように思える。しかしこれは，ヨーロッパの古典的な教養科目のひとつにぞくするのであった。当時，自由学科 artes liberales といわれたものは，もと，手の技術 artes mechanicae と対をなす科目であり，自由人の修得すべき学科なのであった。その内容を説明しておくと，それは7種類の学科からなっていて，算術と幾何学と音楽と天文学とがまとめられて，「四学科」Quadrivium となり，文法と修辞学と論理とがひとまとまりになって，

「三学科」Trivium と称せられた。

これらの自由学科は，中世以来，大学でも履習されていて，18世紀のスコットランドでも，この古い慣習はまもられていたのである。しかし，スミスは論理学講座の担当者となったとき，スコラ哲学における論理学や形而上学よりももっと面白くて有益な研究でもって学生たちの注目をひこうと思い，それまでにおこなわれていた講義の内容を大はばに変えた講義をしたということである。「修辞学と文学」のとり合わせをしめすこの講義録から，われわれはまずその内容の目あたらしさに注目すべきであろう。

この書物のしめすところによると，スミスはこの講義を，1762年11月から63年2月18日まで，週に2度または3度，月曜・水曜・金曜に，あわせて30回，おこなった。ただし，その第1回の講義　おそらくこれは1762年11月19日の金曜日であったろう――のノートは，のちに散佚してしまったためか，この書物には収録されていない。

ここでつけ足していっておきたいことがある。この講義案は全体としてははじめて公けにされたのであるけれど，そのほんの1部はすでに発表されているということである。それは1762年11月22日の月曜日におこなわれた，第3回目の講義の内容であって，それが盤かにされたかたちで，『道徳感情論』の第3版（1761）にたいする附録として印刷されたのである。それには「言語の最初の形成と本来語と複合語とのいろいろな特質についての考察」Considerations concerning the first formation of languages, and the different genius of original and compounded languages と題されており，そのうち，この形で『アダム・スミス初期著作集』*The Early Writings of Adam Smith*, 1800 の中に収められた。

エディンバラにおけるスミスの公開講義をきいたのは100名ばかりの，主に学生であったといわれる。この数は，おそらくは当時としては，異常に多かったのではなかったろうか。そしてその聴講生たちのなかには，のちに政治家になったり，スコットランドの学芸の発展に貢献したりした，名士も多かったということである。そのなかに，ヒュー・ブレーア Hugh Blair という人があった。この人はのちにエディンバラ大学で「修辞学および文学論」の講座――こういう名称の講座は，イギリス全体としても，エディンバラ大学ではじめて設けられたのである――をはじめてもつ教授として任命された人である。1820年の春には，かれは『修辞学』という書物を著すのであるが，この書物のなかで，かれは若いときにアダム・スミスの修辞学の講義をきいたこと，自分がエディンバラ大学で修辞学の講義をしたとき，スミスのその講義のノートを借りて参考にしたことをのべている。一方，スミスの方はブレーアについて良くいわなかったそうであるが，ブレーアの上記の2巻の著述は，そののち60年もの長いあいだ，版を重ね，イギリ

ス，アメリカ，カナダにおいて，修辞学の参考書として用いられていたといわれるから，ブレーアの才能もまた相当のものであったと，いわなくてはならないのであろう。

ところで文学についてのスミスの関心について，ひとこと述べておこう。

スミスのオックスフォード大学留学中に親しんだ学科は，主として，ギリシャやローマの文学，歴史および哲学であったと，伝記作者は語っており，スミスの老年時代の親友で，エディンバラ大学のギリシャ語の教授であったダルゼル Dalzel 教授は，スミスの古典文学の教養が弘くなみはずれて正確であったこと，また，スミスが，老人の第1のたのしみは青年時代の愛読書をふたたびひもどくことだという自説にしたがって，古典的な文学者の書物をよんでいた状景をみたと，語っている。さらに，スミスはフランス人の作家の文章をよむ習慣をもっていて，自分の文体を良くするために，その章句のほんやくをやっていた，またイタリア人の詩にも明るかったということである。そののち，1755年に「エディンバラ評論」Edinburgh Review が創刊されたとき，スミスは，編集者のウェッダーバーン Wedderburn をはじめロバートソン Robertson，上記のブレーア，聖職者ジャーディン John Jardine とともに積極的に関係して，2号しか出なかったその雑誌の2号ともに原稿をよせていることは，有名な事実である。そのほか，スミスの文学に関する関心のふかさと自由で自信にみちた意見とを証する人たちも多いのであって，スミスが文学論の講義をしたといっても，何もおどろくにはあたらないのである。

II

さて，「修辞学および文学論」の講義の内容に入っていこう。

全体は一般論と各論とにわけられる。まず一般論から紹介することにしよう。

スミスは文章 composition を考えるとき，客観的に発展する言語とその言語をあやつる主体との関係で考えてゆく。文章はそれ自身の法則にしたがって発展するが，その発展についてスミスはつぎのような確信をもっていた。それは，言語の発展または進歩 advance は，機械 machine の構造における進歩とひじょうに似ているというのである。機械ははじめのころは複雑な構造をもっていたが，その進歩は，機械の部品類が単純化される，同時に，部品相互の連結が密接になる。その意味では，機械は単純化されるほどよい機械になるといえるのだが，言語のばあいの進歩が，要素が単純化すると同時に相互の連結が密になるということだということは，ある国の言語が他の国の言語と混合するということを伴うということであると，スミスはいう。つまり言語は一方では単純化，他方では他国の言語との混合という2つの条件から進歩するというのである。

分業による機械の発明や進歩を労働の生産力の発展の1契機と考えて，そこに経済の進歩の源を発見したスミスが言語についても同様な思想をいだいていたことを知ることは，大へん意味ぶかいといわねばならない。

さて，スミスの文章の分析は，言語とそれをあやつる主体との関係でおこなわれた。というのは，人間が自分の性格にやどる感情 sentiment を客観的な言語 language と綜合することによって，文章 composition ができる，文章は主観と客観との綜合だと，いうのである。この方法は，スミスの経済理論の方法においてもとられたものである。というのは，経済現象の分析が，たとえば交換が客観的な生産物である商品と人間性の中の自愛心 self-love と結びついている自然な傾向 disposition または propensity との結びつきで理解されたり，資本の蓄積が客観的な資本財 capital stock と人間性の一面としての節欲 parsimony との結びつきから説明されようとされるのと，それは同一だからである。ここにも，スミスの思想の一貫性がみられる。

ところで，スミスは議論をすすめて，どんな文章がよいのか，どんな文体がのぞましいのかということを論じている。そしてこの問いの結論は，文章というものは自然秩序 natural order において表現されることがのぞましいということである。ここにもわれわれは，経済理論におけるのと同一の思想をみいだすのであるが，では，文章における自然秩序とはどういうものなのか。

およそことばや文章にはいろいろの種類があるけれども，簡潔conciseとか適切proper だとか歯切れがよい precise とかいわれるものと，華麗 ornateであって大げさなpompous といわれるものとが区別される。また人間の性格 character には2種類の区別がある。ひとつは単純で卒直な simple and plain な性格，他は感覚にすぐれていて想像力もゆたかであり，往々にして育ちがよく礼儀作法をわきまえているような人物，graces, civilities and breeding のしるしをしめすような人物である。前者は虚飾や礼儀作法にはあまりこだわらず，卒直な行動をする人たちである。そしてこの2様の言語と2種類の性格とが結びつくことによって，いろいろな文体が現われてくるのだと，スミスはいう。そして，単純で卒直な性格と簡潔で適切な言語とが結びついたときに，その文体はもっとものぞましい文体，すなわち自然秩序における文体となるのだと，スミスは主張するのである。上にいう，反対の性格の人と反対の傾向のことばとが結びついたばあいにも，立派な文章になるにはちがいないのだけれど，スミスには前の方の文章が一そうのぞましいのだ。

文章の自然秩序についてのスミスの表現を紹介しておこう。自然秩序とは，「語り手の心にもっとも自然にうかび，語ろうとする物についてかれがいだく意味をもっともよ

く表現するような秩序」である。そして「言語がキチンと適切に描写されるものを表現しており，著者がそのものについていだき聞き手につたえたいと思う感情をば伝えているばあいには，その状態は言語の与えうる一切の美しさをそなえている」とか「この美しい章句はもっとも単純な文章であるとみとめられる」とか語るかれは，simple and plain style を文章道の模範として推賞するのである。

さて，スミスが当時の文筆家のなかでどういう人を立派な文人と呼んだかというと，まずかれはスウィフト Jonathan Swift をあげるのである。スウィフトは plain style の代表であり，simple style をかく人の代表はウィリアム・テムプル WilliamTemple (1628–99) であるという。またアディスン Joseph Addison (1672–1719) の文章をも立派だとして推賞するのだが，その人の文章を評して，スミスは modest だと述べている。たとえばかれはスウィフトについていう「スウィフトのことばはつねに正しく適当であって，修飾がほどこされることがたえてなく，問題の性質にいちばん適したようにしか，かれは書いていない」と。

この人たちと比べて，いまひとつの立派な文章があることを，スミスは承認する。それはたとえばミルトン Milton やシャフツベリ Shaftesbury の文章である。いまこの2人の大思想家のうち，シャフツベリの文章についてのスミスの評価をのべると，それはおおよそつぎのとおりである。シャフツベリは貴族の生まれで，ロック John Locke の教育をうけた人であったから，自由の精神を身につけた人であったのだが，自分の肉体がひじょうに虚弱であったために，抽象的な推理には適しない人になったらしい。かれの性格は貴族的で上品な気品 polite dignity をもっていた。そこで抽象的な推理にしたがうというよりも，むしろ美術や想像力による作品を好み，美術品に関する観賞と研究とを好む人になったのである。そして文体にしても，非常に堂々たる grand 大げさな pompous ものになったのだと，いう。つまり，シャフツベリについても，性格と生活環境とから，文体を deduce して，それにたいする評価をあたえているのである。

以上で文体の一般論を終えることにしたいが，わたくしはスミスの考えについて，重要なことが指摘できると思うのである。それはスミスが文章の自然秩序であり，もっとも望ましい文章だとして推賞するものが，実は特定の階級主体とむすびついた文章ではなかったかという点である。この文章は貴族の人の語るものではない。それは当時のブルジョアジー，国民の大多数をなすというところの「労働貧民」the labouring poor たちの語り，書くところのことばであり，文章であったにちがいないのである。上流階級の人々のかく文体をも立派とみとめるに吝さかではないが，にも拘らず，中流および下

層の国民に属している simple and plain style は文章道の「自然秩序」だと主張しなければならないのがスミスであった。経済学において，自然秩序における市民社会の積極的なメンバーが中流下層の国民だとする思想と，これは全く同一のものであるというべきではあるまいか。スミスにおける自然主義は，修辞学においても，歴然としているのである。

III

以下において，スミスの修辞学の各論についてのべてみよう。

スミスは文章には3種のものがあるという。第1は説話文 narrative composition であり，第2は説論文 didactic composition であり，第3は説得文 rhetorical composition である。そしてこの3種の文章について研究することを，かれはすすめるのである。

さて，スミスは文章の研究をすすめるときの問題点が5つあるという。第1に，その文章が何を語るのかという問題。第2は，何によって，どういう手段で語るのかという問題。第3はその手段をばどういう排列 arrangement で語るのかという問題。第4はどういう文体で語るのか。そして最後に，文章において，古来の有名な文章家の文章について批判的な検討をくわえることである。

上の3種の文章のおのおのについてのスミスの研究をみな語ることは，ここには不可能である。ただ第1の文章，つまり説話文についてだけ，かれの語ることを紹介して，考察を加えておきたいのである。

説話文の中でスミスが力点をおいて検討しているのは，ほとんど全く歴史叙述である。わたくしはスミスの歴史に関する思想が修辞学の講義のなかにもしめされているということを物語りたいのだけれど，歴史叙述についてかれは何を語ろうとするのであるか。かれが特に問題とするのは，上の5つの問題点のなかの第3および第4についてである。歴史的事件をものがたる歴史家が，どういう手段を，どういう風に排列して，どんな文体で語り，叙述したかということが問題になる。これを一般的にいうと，「記述は出来ごとがおこったのと同じ順序でおこなわれるべきである。」聴衆は事件がかたられた順序で起ったと考えることが自然であり，かくして，出来ごとがわれわれの自分の観念に一致するばあいには，その出来ごとについての観念はそのために，いっそう明瞭になる。「この規則は全くあきらかであるから，歴史家でこの規則にそむいた人はほとんどない。」この主張はスミスの歴史的叙述についての一般的規則であって，出来ごとの順序と語られる順序とが一致すべきだというのである。

しかしこの一致があるためには，歴史的出来ごとがわれわれ，歴史をかたる者の nat-

ural conception にぴったり一致していることが必要である。このことは少し複雑であるから，少し立ち入って説明をこころみておこう。歴史家が客観的な出来ごとをかたろうとするばあい，かれはその出来ごとをかれの主観において理解しているのでなければならない。理解しもせぬ出来ごとは語りようがないのである。出来ごとの内容が理解されており，歴史家の natural conception においてとらえられているということは，厳密にいうと，出来ごと自身の論理が歴史家にわきまえられているということにほかならない。出来ごとの論理が歴史家にとらえられておればこそ，歴史家のいだく conception の展開が出来ごとの歴史的展開となって現われるのであり，叙述の順序が出来ごとの発生の順序と一致するという事態が生まれるのである。

つまり，スミスの主張は，実は歴史の論理がわきまえられることによって，成り立つものなのである。そしてこの主張は，ヘーゲルが語り，マルクスがそれにしたがって思索したところの，論理の順序と歴史の順序との一致の要求に通じるものをもっている。あるいは，論理の順序と歴史的生起の順序とのなかに，叙述の順序という第3の主観的契機の導入によって，ことがらをいっそう明瞭にしようとしているともいうことができるだろう。ともかくも，マルクスよりも100年も早く，修辞学をかたりながら，歴史の論理についてひとつの示教的な主張を，スミスはおこなっているのである。

第2に，スミスは現代の歴史学のひとつの傾向について，われわれに注意をうながしている。スミスは説論文を論じるばあいにも，ギリシャやローマの有名な歴史家の文章を非常に刻明に分析しているので，わたくしのような古代史にくらい人間の理解をこえるところが多いのであるが，ここに取り上げたいと思うこともある。スミスは古代の歴史と近代の歴史とのあいだに著しい差異があることを主張し，それについてつぎの注意をあたえている。それは，近代の歴史には党派性が多いということなのである。近代には宗教上および政治上，論争がたえない。そこに党派 sect が生まれる。セクトは自分の主張が事実に依拠していることを証明することが必要なものだから，歴史にはただ事実をのべるだけでなくて，それにたいする証拠を提出することも求められている。そんな意味で，近代の歴史家は party writer であると，スミスは指摘している。しかし，そういう sect や party のために書くというような歴史は，歴史の本質と矛盾するものであり，本当の歴史的叙述を妨げるという悪い結果をもたらしている。だから，近代の歴史は古代の歴史ほど面白くなくなっていると，スミスはいっている。

歴史における古代と近代とのこの比較論は，さまざまの感想を呼ぶであろう。ある人は17世紀にあった「古代近代論争」と結びつけて解そうとするであろう。ある人は，古代の素朴な社会と近代の複雑な，分裂をはらんだ社会との対比を底において，解そうと

するであろう。わたくしはこの問題を『道徳感情論』におけるスミスの主張とかかわらせて，考えてみようと思うのである。

スミスは『道徳感情論』のなかで，「党派」sect や「党派心」spirit of sect をはげしく批判して，人間の社会的行動がよりどころにすべきものは国民 nation であり，愛国主義 patriotism であるべきだと，主張している。国民あるいは民族の中にある，部分的なセクトのために考え，党派のために行動するようなことはすべきではないというのである。

党派精神を批判するのは，その精神の偏狭さのためである。このような批判は，わたくしの知るところにおいても，フランスの啓蒙時代の思想家，たとえばコンドルセにおいてもおこなわれていた。

周知のごとく，スミスはのちに，市民社会をばその階級構成において考察し，内部に階級対立をふくむダイナミックな運動体として市民社会を考えていた。その階級対立というのは，絶対主義の権力をにぎっている，古い身分とそれに寄生しあるいはそれと利害をともにする商人および親方＝マニュファクチュアラーたちが一方に位し，他方ではいわゆる独立生産者層といわれ，政治権力の庇護をうけぬ親方＝マニュファクチュアラーや独立自営の農民層およびそれらの人々とともに労働する，勤労大衆がかれらに立ちむかう。そしてスミスがその後者――「国民の大部分をなすところの勤労貧民」の友であったことは，いわずして明らかであるだろう。ここに階級的対立の現実的把握とその対立を越える契機をその対立そのもののなかからみ出だそうとする，スミスの理論的努力がみられる。このような『国富論』におけるスミスと，上にのべた党派なり党派精神なりの偏狭さを批判して，国民的全体の立場を主張していたかと見える，『道徳感情論』におけるスミスとは，どう結びつけて考えればよいのだろうか。この疑問の答えがどのようにして提供されるにしても，同じような問題を，われわれは，『修辞学講義』における，スミスの近代の歴史と古代の歴史との比較についての見解の中にさぐりあてることができるように思う。そして，この講義についていうと，十分な解答への思索がまだとげられていないように思えるのである。

説論文についてスミスがのべていることは，スミスの歴史に関する方法論――つまりスミスの歴史意識をあざやかに浮び上がらせているといってよい。18世紀のスコットランドの思想界では特異な高度の歴史意識があったということは，現代の学界では十分な市民権をもっている考えであるが，スミスをその中の人の一人に数えあげる十分な根拠があるのである。

IV

残された時間の範囲で，その他の点でわれわれに意味のある問題点を，スミスの講義からひろい上げてみよう。

スミスは説論文の研究のなかで，科学的文体の構造について語っているが，その結論としてつぎのようにのべている。古代の科学と近代の科学とは本質的にちがった方法にしたがっているので，ちがった文体をもっている。アリストートルは古代の文体で語り，ニュートンやデカルトは近代科学の文章をかく。そして後者は，その科学の方法という文章といい，前者よりもはるかにすぐれている。

つぎに，スミスは文章道の発展のためには，必要な先行条件というものがあって，それは商業とそれに伴なう富裕 opulence であるというのである。またスミスが雄弁術 oration を語るとき，かれは古代の雄弁家としてデモステネス Demosthenes とキケロ Cicero をあげてかれらを比べることが多いのだが，かれらの文体を分析するためには，われわれは，ギリシャとローマの社会的背景を明らかにする必要があると，こと細かに論じているところがある。これらは明瞭に『国富論』の主張をしのばせる。また文章道の発展にはつぎのことは一般的だという。それは文章ははじめに韻文が興り，散文はあとから発達する。韻文は野蛮人が音楽をかなでダンスをするときに発達するものであり，散文はいわば「仕事の言語」language of business であるからである。

最後に，社会科学者が方法論上の有力な参考に資してよいと，わたくしが考えるところのひとつのことがらを語りたい。それはスミスが法廷弁論を論じているところにみられる。

法廷弁論 Judicial oration においては，ひとがどういう動機からどういうことをしようと思い，そのことができる機会にめぐまれて，あることをしたのだということを論じることが，必要である。つまり，人間の行動をその動機から因果論的に説明することが必要だということになる。しかしながら，動機があきらかになったとしても，その人がその行動をするにふさわしい性格をもつかどうかによっても，行為は意図を実現するかしないかの差が生じる。だからわれわれは，個々の人間について研究をすると，性格なり動機なりについてわずらわしい面倒な諸条件を克服してゆかなくてはならない。そこでスミスは，法廷弁論においては，個々の人間の行動ではなくて，「全体として考える」consider in the gross ことが必要であるという。このばあいには，細かい分析はなくても，因果論的な研究が可能になると書いている。この「全体として考える」というのは，わたくしなりに解釈して，社会科学は個々の事件についての研究ではなくて，

集団的な類型的な考察をおこなうものだということを意味するということであると考える。スミスが200年まえにこの種の主張をしていたと思え，そこに大へん大きな意義をみいだせるように考えるのである。

以上にのべて来た，「修辞学講義」にあらわれたアダム・スミスの思想を，要約しておこう。第1に，スミスは修辞学を論じるばあいにも，かれ自身の学問的方法に忠実であって，わたくしが自然主義的方法と名づける方法にしたがって考え，当時の文章道を批判しながら，文章の自然秩序として simple and plain style を推賞する立場をとった。第2に，文章はこれをふかく究めようとすると，一方では人間の性格から，他方では社会的地盤から，それを考察せねばならぬとした。第3に，スミスは旺盛な歴史意識をはたらかせて，この種の研究にもしたがった。——これを結論として申しのべておこう。

〔終〕